



# 保育・幼児教育における新型コロナウイルス感染症 に関する研究の動向

古村, 真帆

---

**(Citation)**

神戸大学発達・臨床心理学研究, 22:16-25

**(Issue Date)**

2023-02-28

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/0100482198>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482198>



# 保育・幼児教育における新型コロナウイルス感染症に関わる研究の動向 Trends in Research on the Influences of COVID-19 to Childcare and Early Childhood Education

古村 真帆\*  
Maho KOMURA\*

**要約**：本稿の目的は、コロナ禍における保育・幼児教育に関する研究を概観し、これまでの研究における現状と課題および、今後求められる研究の方向性を探ることである。CiNii を用いて論文検索を行い、23本のうち保育者対象の研究・調査19本を、「感染症対策と保育活動」「保育者の意識やストレス」「子どもの変化やその懸念」「連携」の視点で分析し、事例研究・事例報告4本の概要を示した。その結果、(1) 感染症対策および保育活動の変更の実態が多く、多くの調査や研究において報告され、それらは保育者の業務負担や心理的負担につながっていると答えた保育者や、感染症対策に関わる業務負担は「致し方ない」と捉え以前からの「職場の人間関係」の方がストレスであると答えた保育者がいる、(2) 少人数保育や行事の中止等による保育活動の変更を、肯定的に捉える保育者もいる、(3) 感染症対策の視点から新たな保育活動の展開が見られているが、オンラインを活用する利点と課題がある、(4) 多くの保育者はマスク着用による子どもへの影響を懸念しているが、実証研究は見当たらない、(5) 連携の困難さが示されたが背景要因等の実証研究は見当たらないことを指摘した。今後の課題として、保護者の視点や家庭での様子も含めた検討の必要性を挙げた。

**キーワード**：新型コロナウイルス感染症、COVID-19、コロナ禍、保育、幼児教育

## 1. はじめに

2019 年末より世界各地で感染が拡大した新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19 と記す）は、本稿執筆時の 2022 年 11 月現在においても、人々の生活に影響を与え続けている。子どもたちの生活に対しても大きな影響を及ぼし、2020 年 2 月には、全国の小・中・高校・特別支援学校の一斉臨時休業の措置に関する方針（文部科学省、2020）が示され、子どもたちは学校で授業を受けられない状況が続いた。さらに、2020 年 3 月には新型インフルエンザ等対策特別措置法が成立した。同法に基づき、2020 年 4 月 7 日には感染拡大がみられた 7 都道府県、4 月 16 日には全国に緊急事態宣言が出された。不要不急の外出自粛をはじめとする様々な行動制限が求められた。緊急事態宣言下では、自治体ごとの判断で保育所等における登園自粛要請が出される場合もあり、臨時休園や受け入れ人数の縮小を行った保育園等がほとんどであった（岡田、2021）。緊急事態宣言は順次解除されたが、その後も新規感染者数は増減を繰り返している。

COVID-19 は保育現場において大きな困難をもたらした。例えば、全国私立保育園連盟（2020）は、消毒方法の正確な情報の不

足や衛生管理と保育のバランスに困難さや不安を抱えていると感じている施設（園）が多いことを報告している。多くの保育者は困難さを感じながら、未曾有の状況に対応・対策を行ってきたと考えられる。厚生労働省は、保育所等における COVID-19 対応関連通知・事務連絡を随時更新し、2022 年 11 月現在 101 件の通知や連絡を示し、「保育所等における新型コロナウイルスへの対応にかかる Q&A について」は第 18 報が最新である（厚生労働省、2022a）。なお、COVID-19 に関する社会の動向と厚生労働省からの保育所等への通知・連絡等に関する保育現場の動向は、野澤・淀川・菊岡・浅井・遠藤・秋田（2020）、野澤・淀川・中田・菊岡・遠藤・秋田（2021）、五十嵐（2022）によって整理されている。

COVID-19 が保育に及ぼした影響の調査も行われている。保育・幼児教育施設に関する調査のレビューには、2020 年 4 月から 2020 年 8 月までに刊行された調査を対象とした野澤他（2020）、2020 年 9 月から 2021 年 8 月までに刊行された調査を対象とした野澤他（2021）がある。両レビューでは、衛生管理等の業務の増加、行事を含めた日々の実践への悩み、外部の専門職との連携、ICT 環境整備の必要性等が報告されている。それらに加えて、野

\* 神戸大学大学院人間発達環境学研究所博士課程後期課程、日本学術振興会特別研究員

2022 年 11 月 30 日 受稿  
2022 年 12 月 21 日 受理

澤他 (2021) では、感染予防や ICT 環境などのための施設整備を行ったが、そのための財政支援は不十分であることが報告されている。

しかし、野澤他 (2020)・野澤他 (2021) は、文部科学省や民間団体が実施した調査の報告書等が多く含まれ、それらの調査の整理にとどまっている。そのため調査内容から研究の現状と課題を分類する等の詳細なレビューが行われたとは言い難い。また、対象期間以降に研究論文は増えていることが予想される。COVID-19 の保育への影響は継続することが予想され、COVID-19 に関連する調査や研究を実施することは早急の課題といえる。さらに、COVID-19 の保育への影響と自然災害における保育への影響に、重なりを見出すことができる (境・栗原, 2021) と指摘されている。例えば、2011 年に発生した東日本大震災では、原発事故による放射能汚染の問題により、戸外活動や栽培活動を制限される場合があり (鈴木, 2016)、「これまで通りの保育」をすることが難しい中、保育者は工夫しながら日々の保育に尽力していることが報告されている (佐野・糟谷, 2013)。このように、COVID-19 関連の調査を進めることは、感染症だけではなく他の非常事態における保育・幼児教育の在り方を検討することにも繋がる。未曾有の事態に向き合った経験を整理することは次の類似の出来事に予防的な構えを形成しうる (及川他, 2022) ため、意義があると思われる。

そこで、本稿では、COVID-19 における保育・幼児教育に関する調査・研究を概観し、COVID-19 における保育・幼児教育に関する実態調査や実証研究を整理する。加えて、現状と課題を明らかにするとともに、今後求められる研究の方向性を探ることを目的とする。

## 2. 方法

### (1) 論文の選定

以下の基準で論文を選定した。まず、2022 年 11 月に国立情報学研究所の論文データベース CiNii を用い、キーワードに“COVID-19”または“新型コロナウイルス”および“保育者”または“保育園”または“保育現場”または“幼稚園”または“こども園”を指定し検索を行った。検索によってあげられた題目・キーワード・要約を確認し、本レビューの目的に従い、保育・幼児教育施設に関する日本語で出版された論文・調査を選定した。選定にあたっては、幼稚園教諭・保育士養成課程に在籍する学生を対象とした調査、大学での模擬実践に関する調査、感染予防対策に関する自治体等の事業、海外の事例に関する調査、さらに十分な情報が得られない学会発表原稿等は除外した。なお、COVID-19 に関連する研究・調査数は少ないと考えられるため、査読の有無は基準に入らなかった。最終的に、23 本の研究論文が選定された。

## 3. 結果

選定した論文の内容を整理した。大きくは、(1) 実証研究・実態調査 19 本、(2) 事例研究・事例報告 4 本、の 2 つに分類できた。

### (1) 実証研究・実態調査

該当論文を調査実施時期順に表 1 に示した。これらの調査内容や結果を整理したところ、「感染症対策と保育活動」「感染症対策と保育活動」「保育者の意識やストレス」「子どもの変化や懸念」「連携」に分類することができた。順に述べる。

#### ① 感染症対策と保育活動

COVID-19 に関連する保育での困りごととして「感染症対策」は最も多く回答され (横井・鈴木, 2021)、多くの調査・研究において感染症対策に関する言及がみられ、感染症対策の内容や頻度等の実態が報告された (長谷川, 2021; 加藤・太田・渡邊・中山, 2021; 加藤・太田・原野・姫田・渡邊, 2022; 溝田・佐藤, 2021; 七木田, 2021; 小田・橋浦, 2021; 岡田, 2022; 芹澤他, 2021; 杉江・新美・古橋・新井, 2022; 徳田, 2022; 渡部, 2022; 横井・鈴木, 2021)。例えば、園の感染対策の実施率の高い項目には、「保育者のマスク着用」が 100%、「消毒」「換気」「食事時の飛沫感染の防止」「検温の実施」はいずれも 90% を超え (杉江他, 2022)、また消毒の実施頻度は日に 2 回が多かった (小田・橋浦, 2021)。

また、感染対策を行いながら日常の保育活動を行う実態も数多く報告された。例えば、おやつ・食事の際に子どもは対面で座らない (岡田, 2022; 杉江他, 2022)、幼児に配膳をさせない (杉江ら, 2022)、会話を避けるように促す (遠藤・小野, 2022)、屋内外での感染対策 (「一人一人の感覚を広くとる」「人数制限」等) (小田・橋浦, 2021; 杉江ら, 2022; 渡辺, 2022)、衛生管理や衛生教育を進めるための実践の工夫として、黙食を保育者の言葉により指示するのではなく、オルゴールの小さな音に耳を傾けさせることや、手作りの可愛いマスクを着用することで、子どもに怖い印象を持たせない等が報告された (徳田, 2022)。

加えて、保育内容の変更や中止も余儀なくされた。例えば、異年齢保育を避ける (岡田, 2022) や、日常の保育活動においてプール、調理、外部講師の教室等を控える (小田・橋浦, 2021)、運動会や発表会、保育参観等の行事の開催を中止・縮小した園も多く報告された。これまで当たり前に行うことができていた行事が制限される中で、保育者は子どもの育ちにとって必要な経験と感染症のリスクを天秤にかけながら、その都度、保育者が判断し、保育が営まれている (渡部, 2022) 様子が報告された。

#### ② 保育者の意識・ストレス

COVID-19 の感染拡大下における保育者の意識やストレスに着目した調査には、芹澤他 (2021)、長谷川 (2021)、加藤他 (2021); 加藤他 (2022)、溝田・佐藤 (2021)、小田・橋浦 (2021)、及川 (2021)、及川ら (2022)、岡田 (2022)、徳田 (2022)、渡部 (2022)、横井・鈴木 (2021) があつた。

及川他 (2022) は、2020 年度の保育者の意識をキャリア別に調査した。その結果、若手・中堅は日々の保育における具体的な困難や気づきを中心であり、それらに加え熟練保育者は子どもの発達への懸念や保護者との関係についての振り返りが多く、管理職では保護者や職員という大人に対する振り返りが多かったと報告した。同様に、保育者が認識する保育の変化を調査した加藤・太田・渡邊・中山 (2021) では、多くの保育者が【行事の減少・変化】や【感染予防】を保育の変化として強く認識し、以前にも増して子どもの健康に留意しながら保育をする様子が示されたと報告した。

表1 新型コロナウイルス感染症と保育に関連する研究・調査

著者名	目的	手続き	結果の概要		
			感染症対策と保育活動	保育者の意識やストレス	子どもの姿の変化や懸念
境・栗原 (2021)	2020年4月～8月上旬の期間に生じた事象が保育者の意識や価値観に与えた影響について考察する。	前橋市子ども園5歳児担任の保育者22名を、月1～2回の頻度で計9回インタビュー	—	短時間で激しく変化する状況への対応に迫られるなかで、保育者の子どもへの介入方針や実践への評価の観点が大きく揺さぶられていた	—
磯井・鈴木 (2021)	COVID-19の影響下で保育者がどのようなことに困り、それが危機管理上どのような意味をもつのか明らかにする。	愛知県、神奈川県、岐阜県、広島県にある、7ヶ所の保育施設に勤務する保育者7人に「新型コロナウイルス感染症で困ったと感じていること」についてインタビュー調査	2020年5月、7月	感染症対策と理想の保育との間で葛藤する保育者の苦悶、ネガティブな面だけでなく、行事の原直しの好機とポジティブに捉ええる姿勢	休園の期間では、家庭での子ども様子の把握の困難さ、通常保育再開後は生活リズムの乱れや体力低下等、マスク着用による子どもへの不利益への懸念
声澤ら (2021)	コロナ禍の保育における保育の取り組み、困難、子どもや保護者の影響、どのような気付きや発見があったか考察する。	東京都の公立保育園40園。回答者は管理職、2～5歳児の担任保育士、フリー保育士に質問紙調査（本誌では主に、管理職対象の調査が示されている）	2020年7月末～9月末	自治体のガイドラインに沿いながらも、園の実情に合わせ、子どもの育ちを重視した工夫の実施	—
七木田 (2021)	マスク着用の子どものおおよび保育施設における保育への影響について実態調査する。	保育者および保育施設従事者138名を対象に、質問紙調査（マスク着用による乳幼児の変化、保育者の変化等の項目を選択式、自由記述式で回答）	2020年7月～12月	マスク着用における園の方針、保育者のマスク着用について	保育者のマスク着用における乳幼児の変化（特に「食事」「睡眠」が減少）や歌等の活動」「聴覚」の発達」に着目した考察
小田・橋浦 (2021)	保育の現状や、対応、工夫、配慮等をまとめ、保育者が少しでも安心して保育に向き合うための基礎資料の作成する。	仙台市を中心とした幼稚園（40園）、保育所（園）60園・認定こども園（20園）を対象にアンケート調査（回収率25.8%）	2020年8月	各園で感染症対策を考え実施しているため、対応に幅がある。感染症対策への情報は積極的に収集されている。	幼稚園・保育園・認定こども園など業種を越えた情報共有はなされていない。
徳田 (2022)	4.緊急事態宣言が発令された2ヶ月、園が迎えた年少児の担任教師が1学期中の新人園児や保護者の観察からどのようなことを認識し、どのような保育に取り組り組んだかを検討する。	関東地方東部の私立N幼稚園の年少組担任5名を対象に半構造化面接	2020年8月～9月	衛生管理や衛生教育に関する取り組みについて（食事時間に言葉かけ、遊びの工夫、「手洗いのかわいさ」を着用等）	幼稚園生活の導入に困難が生じたため、工夫（電話や連絡帳）を頻繁に活用
及川 (2021)	COVID-19感染拡大下の保育者に困難感を生じさせていた要因を検討する。	主に北海道内の保育者60名（こども園、幼稚園、保育所）に、保育者の困難感、困難感の背景要因（保育内容の異直しや異通し・保育者子ども同士のかわり・仕事・関係者との連携）等をWebアンケート調査	2020年8月～9月	重回帰分析により「仕事量の増加」が困難感を生じさせたことがわかった。	—
長谷川 (2021)	感染拡大防止に努めながら保育をすすめる中で、保育者はどのような変化を感じ、その変化にどう対応しているのか、保育内容の5つの領域の1つである人間関係」に着目して検討する。	福島県福島市、二本松市内の幼稚園・認定こども園・保育所に勤務する保育者8名を対象に半構造化インタビュー	2020年8月・9月	保育の変化で最も多いのが（マスク着用の影響）であったが、マスク着用により対応が難しくなる保育者の方が多い	感染予防を子ども自ら行う姿が増加、マスク着用により、保育者の表情が分りづらくなり、マスクが子ども同士がコミュニケーションを図るきっかけになる等
小林・上野 (2022)	食育について保育士・保育教諭と栄養士・調理員がどのように連携しているか、どのような連携していくべきかを明らかにする。	富山県内の保育所・こども園に勤務する保育者139名、調理関係者283名を対象に質問紙調査（自由記述を質的分類）	2020年10月～11月	衛生管理に関する単語が頻繁に使用され、【行事の減少・変化】【感染予防】等が保育の美化として挙げられた。	調理関係者の子どもの発達への関わりがコロナのためになくなったという趣旨の記述が複数あった。
加藤ら (2021)	COVID-19感染拡大下における保育の変化を明らかにする。	保育者16名に自由記述を中心とする質問紙調査	2020年11月～12月	業務増加、自身の感染等の不安など	保護者とのコミュニケーションに関する課題や保育者同士や保護者の感染対策への価値観の違い

(表 1 つづき)

結果の概要							
著者名	目的	手続	調査期間	感染症対策と保育活動	保育者の意識やストレス	子どもの姿の変化や懸念	連携
杉江ら (2022)	園長と保護者を対象とした調査から、COVID-19の状況下での感染症対策及び保育者のあり方と家庭との連携について、情報発信の視点から現状と課題を探索。	愛知県内の12市町村公立の幼稚園・保育所、こども園など園長91名及び保護者180名に質問紙調査（園長対象の調査のみ右記に記載）	2020年11月～12月	感染症予防対策について、保育者のマスク着用や消毒等に加え、子どもの成長発達を保障する様々な工夫が行われていた。	—	—	保護者への情報発信の内容や方法
岡田 (2022)	保育現場がコロナ感染症と共存していくために取り組む取り組みについて考察を行い、「コロナ感染症拡大における保育環境の変化と保育者のストレスについて」検討する	愛知県全域の保育施設222園、質問紙調査を行い、詳細な実態を調査協力園のキャリア別に（園長、主任、職員）の聞き取り調査を実施	2020年12月～2021年1月	感染症対策、保育内容の変更	多忙感やストレス（不安、緊張など）の増加が報告された。一方で「感染防止対応が大変だが、行事等が縮小したことにより余裕がもてた」という意見もみられた。	—	—
溝田・佐藤 (2021)	宮城教育大学附属幼稚園におけるCOVID-19の影響を把握する。	宮城教育大学附属幼稚園の教員10名にWebアンケート調査	2021年1月	感染症対策、保育内容、環境構成、食育の実施状況の改善など	「現在、困っていること」としては、多くの保育者が「対応に追われず、保育の実施状況の改善など」を報告した。	—	各保護者の感染症対策に対する意識の違いや園の方針の理解を求める際等、保護者対応の難しさを感じる場面が多かった
及川ら (2022)	2020年度の実践に対する保育者のふり返りを検討する。	29郡道府県の保育者191名、若手・中堅・熟練者・管理職という3つのキャリア別に自由記述をテキストマイニングにより分析	2021年3月	どのキャリアにも「子ども」「保育」「行事」「感染」の語彙は頻出した。	—	—	管理職では保護者や職員という大人に対する振り返りが多かった
加藤ら (2022)	保育所・幼稚園の園長への調査を行い、コロナ禍における保育・運営の变化、緊急事態宣言時の保育について明らかにする。	宮城県、福島県、千葉県、長野県、大阪府、兵庫県、徳島県、福岡県の幼稚園・保育所、こども園の園長24名を対象に質問紙調査	2021年3月～4月	園種や地域による保育の変化	88%が職員の疲労が増加したと回答。相関分析の結果、「清掃の時間」「新しい保育の導入」「間接的な保育の対応」「外遊びの時間」「会議の時間」の増加との有意な正の相関。「子どもとのスキニップ」と有意な負の相関がみられた。	—	—
渡部 (2022)	愛知県三河地域の新型コロナウイルス感染症影響下における保育の実態を調査する。	幼稚園、保育所、こども園（一部支援センター等）157園にアンケート調査	2021年7月～8月	消毒は全ての園で実施。行事の変更や中止	「ストレス」「不安」「疲れ」「緊張」などマイナスな印象が強い。	—	子どもとの「感染予防についての意識や行動の違い」、保育者が常時マスクを着用していることと与える子どもへの発達の影響を懸念
遠藤・小野 (2022)	保育者・園長を対象としたグループインタビューの分析を通じ、COVID-19流行下の保育現場における人間関係と協働の諸相について、食と園内における学びを視点として検討する。	保育者5名のグループ、園長4名のグループ形式のグループインタビュー	2021年10月・11月	朝食を促すなど食の場における感染症対策	子ども一保育者間の食の場でのやりとりの質の変化や、調理従事者とのコミュニケーションを通して食に対する関心を抱く機会をもてないことへの懸念	—	園内研修の実施形態と変化、協働の変化、職員間の連携
吉川・那須 (2022)	新型コロナウイルス感染症流行による巡回相談等、専門機関との連携における課題について明らかにする。	保育園園長2人にインタビュー	2020年6月	—	—	—	Web会議システムを利用することの利点と課題
内田 (2022)	COVID-19前後の保育施設内での子どもの遊びの変化を担当クラス別・地域別に検討する。	全国の保育職（2019年から2年以上勤務）を対象としたWebアンケート	記載なし	—	—	—	集団での運動遊びは大きく減少、個別での運動遊びは増加した。ままごと遊びは減少した。

このような感染症対策を行いながらの保育による、保育者の多忙感、疲労感、ストレス（不安・緊張など）の高まりを報告した調査（渡部，2022）もみられた。詳細にみると、感染症対策と理想の保育の間での葛藤や感染症対策と幼児教育の両立への悩み（長谷川，2021；横井・鈴木，2021），及び、保育者自身の感染への不安（加藤他，2021）が挙げられることが分かった。このような保育者の疲労増加の背景要因を検討した調査に、及川（2021）・加藤他（2022）の研究がある。及川（2021）では、保育者60名を対象に困難感を生じさせていた要因を重回帰分析によって検討したところ、「仕事量の増加」「例年の保育計画の見直し」「今後の保育のねらいと見直し」が困難感を生じさせたことが明らかになった。さらに、自由記述では、「仕事量の増加」に対して、園内の換気・消毒、以前は保護者に協力を依頼・分担していた内容が追加業務となった等、「例年の保育計画の見直し」に対して、感染防止対策と折り合いをつけつつ、例年幼児たちが経験する保育内容を可能な限り継続しようと葛藤・工夫した等、「今後の保育のねらいと見直し」に対して、行事を実施する意味を問い直す契機と考え、いきなり中止にはせず何とか実施しようと検討・葛藤したこと等が挙げられた。また、加藤他（2022）の所長や園長を対象とした質問紙調査においては、88%が保育者の疲労が増加したと回答し、相関分析をした結果、「清掃の時間」「新しい保育の導入」「間接的な保育の対応」「外遊びの時間」「会議の時間」の増加との間に有意な相関がみられ、「子どもとのスキンシップ」との間に負の相関がみられた。

保育者の多忙感や疲労増加を示す一方で、COVID-19の感染拡大下での保育に肯定的な意味を見出す知見も得られた。具体的には、通常の保育や、行事の見直しがなされ、保育の変更の難しさと同時に少人数保育の良さを確認し、子どもの育ちを重視した保育の再検討のきっかけとなった（加藤他，2021；芦澤他，2021；横井・鈴木，2021）という知見である。さらに、保育者にとっても、「感染防止対応が大変だが、行事等が縮小したことにより余裕がもてた」（岡田，2022）や、若手、中堅保育者からは行事の中止によるゆとりができたことで先輩保育者からの丁寧な指導を受けられたことを喜ぶ姿が報告された（及川他，2022）。また、長谷川（2021）は、感染症対策に関する業務負担は大変と感じながらも仕方がないと考え、COVID-19以前からの職場の人間関係の悩みにもストレスを感じる保育者がいたことを報告した。

なお、以上の調査はいずれも横断研究である。境・栗原（2021）の1本にはなるが、縦断研究による保育者の意識の変容が明らかにされている。具体的には、こども園5歳児担任の保育者2名を対象に、緊急事態宣言が出された2020年4月～8月の期間に月1・2回の頻度でインタビュー調査を実施した研究であった。その結果、登園自粛期間では、登園を続ける子どもとの活動を積極的に展開し、少人数保育への肯定的な語りが増出された。しかし自粛が解除された後は、自粛下での少人数保育に対する肯定的な見方を翻し、危機感を持って「年長児らしさ」を求める保育へ移行した。このように、短時間で激しく変化する社会的状況への対応に迫られる中、保育者の子どもへの介入方針や実践への評価の観点が大きく揺さぶられたことが報告された。

### ③ 子どもの姿の変化や懸念

次に、COVID-19の感染拡大前後での子どもの姿の変化に関する研究を整理した。まず、保育施設内での子どもの遊びの変化に着目した内田（2022）は、集団での運動遊びは大きく減少し、個別での運動遊びの増加、ままごと遊びの減少を報告した、また半構造化面接における保育者が感じる子どもの変化としても「室内で保育者と、または一人で遊ぶ姿増えた」という語りが報告された（長谷川，2021）。他にも、休園・登園自粛期間終了後の子どもの変化について、「スキンシップの減少」が挙げられ、ハイタッチは肘を使うなど、子ども自身が自ら意識して気を付ける様子（溝田・佐藤，2021）や、手洗い・うがい・消毒等を子ども自らが行う姿が増えた等（長谷川，2021）が報告された。加藤他（2021）では、スキンシップを控えることへの子どもの心の発達を心配する保育者の記述が報告されている。その一方で、休園や登園自粛期間終了後の子どもの変化についてあまり影響が見られないと回答が得られた調査もある。例えば、「園児同士のスキンシップ」「外遊びの時間」「園生活への適具合」「社会性の遅れ」「言葉の発達」「家でのゲームやメディア接触時間の増大によるマイナスの影響」であった（溝田・佐藤，2021）。

さらに、マスク着用の影響が報告された（遠藤・小野，2022；長谷川，2021；加藤他，2021；渡部，2022）。長谷川（2021）・渡部（2022）では、保育者が子どもと接する中で、子どもの表情や言葉等からマスクを着用する保育者の表情が分かりづらいつ感じているのではないかと考える保育者が多いことや、保育者自身が子どもの表情が分かりづらいため、子どもの気持ちに共感しづらいつことが保育者の語りから明らかにされた。また、「乳児や障害児は、特に保育者の表情が大切な読み取りの育ちとなり、乳児にとって食事と共にいることが咀嚼の促しになるが、保育者が常時マスクを着用していることで、育ちに影響があると思われる」という保育者の語りも報告された。マスク着用の実態に着目した調査としては七木田（2021）がある。七木田（2021）は、保育者および保育施設従事者138名に感染予防対策としてのマスク着用の実態を検討する質問紙調査をした。その結果、大半の保育者が「子どものマスク着用について保育で気になることがある」と回答し、保育者のマスク着用の影響として、「子どもの反応が乏しくなった」と過半数の保育者が回答した。また、自由記述では、ポジティブな反応が10名、ネガティブな反応が12名でみられ、必ずしもマスク着用を否定的に捉えていない現状も明らかにされている。ポジティブな反応としては、「（保育者の）目を見て（子どもが）話してくれるようになった」や「（保育者の）表情や顔をじっとみつめる」などがある。一方ネガティブな意見として「（保育士の）表情や声が伝わりにくい」が多く、「食事」に関する記述（例えば、「マスク越しに「モグモグ」と言われても分からない」）、「読み聞かせや歌等の活動」に関する記述（例えば、「絵本の読み聞かせにおいて、マスク着用時の読み聞かせには興味を示さない子どもも、マスクを外して読み聞かせると興味を示し最後まで座って聞くことができる」）、「聴覚の発達」に関わる記述（例えば、「聞き返される回数が増えた」「どの先生から呼ばれたか分からず、キョロキョロする」）が示されている。加えて、保育中のマスク着用による保育者自身の変化についても検討されており、最も多い回答は「声が大きくなった」で73%であった。自由記述では、子どもに対しては「保育士の表情が分かりにくく、声で指示することが多くなっている」、保育者間では「保育者同士の表情による細かなコミュニケーション

がとりにくい」「マスクは息苦しいので手短で、簡単な内容になった」等が挙げられたという。さらに、マスク着用における園の方針については、七木田（2021）では、「方針が決まっている」は74.6%、「決められているが運用は個人に任されている」は18.8%、保育者8名を対象にした長谷川（2021）では、「園からの指示が無く保育者子ども共に殆ど着用していない」、「強制はされていないが保育者も子どももできれば着用してほしいと言われている」等、園によって対応が違うことが分かったと指摘した。なお、横井・鈴木（2021）は、保育施設で長期的に保育者がマスクを着用することが、子どもにどのような影響を与えるか明確にした論文は見当たらないことを問題視している。

また、感染症対策に取り組む必要性が強く指摘される食の場に関する懸念も報告されている。具体的には、子ども—保育者間の食の場でのやりとりの質の変化への懸念（遠藤・小野，2022；加藤ら，2021；渡部，2022）や、子どもが調理従事者とのコミュニケーションを通して食に対する関心を抱く機会をもてないことへの懸念（遠藤・小野，2022）であった。

#### ④ 連携

連携に関する調査は、遠藤・小野（2022）、長谷川（2021）、加藤他（2021）、小林・上野（2021）、溝田・佐藤（2021）、小田・橋浦（2021）、及川他（2022）、杉江他（2022）、徳田（2022）、横井・鈴木（2021）、吉川・那須（2022）、渡辺（2022）が分類された。園内連携として、遠藤・小野（2022）は、園内研修の実施形態の変化があり、実施自体の影響（実施頻度の減少やできない期間があった）、参加者の制限、密にならない配慮（ZOOM 利用など）が語られた。単に研修ができないだけでなく、研修の場が COVID-19 感染拡大前は担当クラス以外の職員とのコミュニケーションの機会や情報共有の機会であったが、そうした機会が持てず、職員間の関わりを深める機会が減ったことが明らかになった。加えて、在宅勤務が行われたことで、担任間の情報共有が難しく、クラス間の関わりが持てず園全体の子ども様子を体感的に理解できず、組織全体での理解の困難さがあること、交流機会がインフォーマルな場合も含めて減ったことが示された。一方で、困難な状況だからこそ連携の大切さを感じ、職員全体が情報共有を意識することで、関係性は大きく変わらないという意見もみられた。また、保育者同士だけではなく、調理従事者との些細な情報交換を気軽にできないことでの意思疎通の難しさも挙げられた。その他、保護者との連携に難しさを指摘する調査もあり（長谷川，2021；溝田・佐藤，2021）、家庭による感染症に対する意識や考え方の違いが、協力や連携の困難さに繋がっていることが報告された。

他機関との連携については、小田・橋浦（2021）及び吉川・那須（2022）において検討された。具体的には、小田・橋浦（2021）は、COVID-19 に関する情報収集に関して、大半の園が自治体、新聞、ニュース、姉妹園・系列園など等の複数の媒体から得ているが、他の保育園・幼稚園・子ども園等からは得ていなかった。今後は園の垣根を越えた地域レベルでの情報共有が重要となると指摘した。吉川・那須（2022）は、COVID-19 感染防止のために園への訪問や、療育センター等の専門機関の外来療育受診が滞っている現状や、Web 会議システム利用による連携の利点と課題を報告した。利点としては、感染リスクに左右されることなく連携できること、担当保育者だけ

でなく複数の保育者が参加することも可能となり、園全体での共通理解にも繋がること等が挙げられた。一方で、Web 会議システム利用の課題や懸念も指摘された。対象児を直接見ることができないため、特に新規の対象児の場合、子どもの様子を伝える際の難しさや、具体的な手立てなど実際に見ることができないことなどが課題として挙げられた。

#### (2) 事例研究・事例報告

次に、事例研究・事例報告をレビューする。事例研究や事例報告には、休園期間中のオンラインの実践（西林・佐藤・乾・藪，2021；小野・水内・神永，2020）、大学と子ども園・保育園との双方向型のオンラインオペレッタ公演に関する実践報告（阿部，2022）、インクルーシブ保育の視点から配慮が必要な子どものクラスの保育の様子と子どもの変化の検討（五十嵐，2022）が該当した。対象論文は事例の実施期間順に表 2 に示した。

まず、COVID-19 感染拡大下において、日常の保育活動や行事の制限だけではなく、感染予防の視点から生まれた新たな保育の展開がみられた。小野・水内・神永（2020）は、幼稚園の休園期間に YouTube による動画配信に着手し、その取り組みによる幼稚園再開後の幼児と教師の信頼関係づくりや教育活動への効果を調査した。その結果、動画配信により幼児が幼稚園と切れ目なくつながっているという気持ちや、教師に親しみを感じることができたこと、保護者が動画を見て喜んでいる幼児の姿を見て安心感を得たこと、幼稚園の COVID-19 感染予防対策についての情報を得ることで新しい幼稚園での生活が予想できたこと等の効果がみられたと報告した。同様に、西林・佐藤・乾・藪（2021）においても休園期間中にオンラインでの「おはようコール」という実践を行い、子どもや保護者の期待の大きさを示す一方で、オンラインの限界として発信元からの受信先への一方通行の伝達手段に陥るため、双方向の伝達手段が必要であることを指摘した。また、他機関との連携に関する実践報告もあった。阿部（2022）は、大学と子ども園・保育園をオンラインでつなぎ計 9 回実施した双方向型のオペレッタ公演について報告した。保育者の感想では「プロジェクターを使用して映画などを見ることもあるが、その時よりもかなり集中していた。おそらく、画面の向こうの学生たちが自分たちの動きに呼応していることが興味深かったのだろう」など、子どもたちがかなり興味を示していたことを表す感想が多かった。また「コロナ禍でほとんどすべてのイベントが中止になる中、子どもたちにとって特別な時間を持つことができた」や「(直前に生活発表会で自分たちが劇あそびを体験していたこともあって) その後の保育の中でも劇ごっこを自発的に楽しむ姿が見られた」など、公演の体験が子どもたちの保育活動により影響を与えたことも示される語りが得られた。

障害等の配慮を必要とする子どもが関わるインクルーシブ保育に言及した五十嵐（2022）は、公立保育所 2 園でグループ・インタビューを行い、2020 年 4 月に発令した緊急事態宣言中から宣言解除後の保育の変容過程と配慮を必要とする子どもを含むクラスの子どもの姿について調査した。その結果、両園ともに COVID-19 の感染症対策による変更を通して、配慮が必要な子どもの違う姿が見え、それまでの保育を問い直すことにつながった。具体的には、A 園で

表2 新型コロナウイルス・保育に関連する事例研究・事例報告

著者名	目的	調査方法	実践期間	概要
小野・水内・神永 (2020)	動画配信の取組が幼稚園再開後の幼児と教師の信頼関係づくりや教育活動へのつながりに効果があるかどうかを検討する。	保護者への電話による聞き取り、幼稚園再開後の幼児の様子を観察	2020年3月～6月	動画配信により幼児が幼稚園と切れ目なくつながっているという気持ちをもてたこと、教師に親しみを感じることができたこと、保護者が動画で喜んでいる幼児の姿を見て安心感を得たこと、幼稚園のCOVID-19感染予防対策についての情報を得ることで新しい幼稚園での生活が予想できたこと等の効果がみられた。
西林・佐藤・乾・藪 (2021)	「オンライン幼稚園」実践を記録する。	園長による実践記録	2020年度	休園期間中に実施された、オンライン幼稚園「おはようコール」の取り組みを通してオンラインの利点と限界を記述した。
阿部 (2022)	大学とこども園（保育園）をオンラインでつなぎ、双方向型でのオペレッタ公演」の企画・実践を記録する。	大学生や園の保育者の記録・感想の収集や観察	2020年度	園の保育者たちの感想では「普段は多動な子どもが座って見ていたことが印象的であった」等、子どもたちがかなり興味を示していたことを表すものが多かった
五十嵐 (2022)	2020年4月に発令した緊急事態宣言中から宣言解除後の保育の変容過程と配慮が必要とする子どもを含むクラスの子どもの姿について検討する。	首都圏の公立保育所、保育者2園6名。各園それぞれでグループインタビュー（園長、副園長、担任保育者3人）	2020年4月～11月	保育環境の変更から配慮が必要な子どもの別の側面が見えてくることで、それまでの保育を問い直すことにつながった。

は、保育環境の変化による子どもの姿の変化例えば、出入り口を玄関から園庭に変更したことで、登園時に他の子どもが園庭で遊ぶ姿を目にすることが先の見通しになり、配慮を必要とする子どもが手早く朝の支度をし、遊びにスムーズに入ることができたことが報告された。また、B園では、緊急事態宣言中では、登園人数が減り保育者がより丁寧に子どもと関わることができたため、配慮の必要な子どもの得意なことを見つけ出すことにつながり、周囲の子どもにも配慮が必要な子どもが認められる過程が報告された。

#### 4. 考察

##### (1) 感染症対策および保育活動の変更

対象論文のうち、感染症対策への言及が最も多くみられた。消毒等の感染症対策の実施頻度は多く、保育者が日常の保育準備に加えて感染予防・感染防止に追われる状況が示されている。また、感染症対策を行いながらの日常の保育活動の実施や行事の制限・中止が報告された。次節で詳しく論じるが、感染症対策をはじめとした業務負担の増加は保育者のストレスにもつながっていることが明らかになった。

さらに、COVID-19感染予防の視点から、オンラインを活用した動画配信や双方向型のオペレッタ講演といった新たな保育活動の展開も報告された（西林他, 2021；小野他, 2020；阿部, 2022）。動画配信により幼児が幼稚園と切れ目なくつながっているという気持ちや、教師に親しみを感じることができた等の効果がみられた（小野他, 2020）。一方で、発信元からの受信先への一方通行の伝達手段

に陥るオンラインの限界も示唆された（西林他, 2021）。さらに本稿の対象論文では、検討されていなかったが、動画配信等によるオンライン実践がかえって子どものメディア視聴を促進する危険性が考えられる。この推察を支持する調査として、緊急事態宣言下を実施された家庭を対象にした調査（全国認定子ども園協会, 2020）がある。この調査において、子どもの困りごとの中に「テレビ漬け、ゲーム漬けになった」が多く挙げられている。もちろん、保育者が作成した動画配信だけを子どもたちは見ているとは考えにくい、子どものメディア視聴時間の増加の一つの要因になっている可能性はある。この点について、電子メディア漬けを問題視し、アウトメディア、オフラインに誘導するため、あえて動画配信を使用したこども園の実践がある（井内・内田, 2021）。具体的には、保育者が作成した動画配信で工作の方法や遊びの説明をし、動画を見終わった後は画面を閉じて実際に遊ぶことを誘導するというものである。このようなオフラインを促す工夫は、オンライン実践をする際には重要と考える。

##### (2) 保育者の意識やストレス

また、保育者の意識・ストレスに言及する調査も多かった。実態調査においては、感染症対策と理想の保育の間での葛藤や感染症対策と幼児教育の両立への悩み（長谷川, 2021；横井・鈴木, 2021）及び、保育者自身の感染への不安（加藤他, 2021）が挙げられた。さらに、加藤他（2022）や及川（2021）の研究により、保育者の疲労感の背景要因が検討されている。2つの研究に共通する要因として、感染症対策を含む仕事量の増加、例年の保育計画の見直し・新しい保育の導入が考えられる。多くの保育者が【行事の減少・変化】や【感染予防】を保育の変化として強く認識し、以前にも増して子

もの健康に留意しながら保育をする様子が示されたと報告する。赤木・古村・瀬川・川地・木下（2022）は、COVID-19感染拡大下における放課後等デイサービスの職員のストレス状況を調査したところ、正職員・非常勤職員の間で、ストレス状況に違いが見られたと報告している。この知見を踏まえると、保育者の疲労感にも勤務形態の違いが影響している可能性がある。勤務形態等の勤務条件を含め、さらなる検討が必要と考える。

COVID-19感染拡大下が保育者への負担やストレスを増加させた知見の一方で、COVID-19感染拡大下での保育に肯定的な意味を見出す知見も得られた。それは、通常の保育や、行事の見直しがなされ、保育の変更の難しさと同時に少人数保育の良さを確認し、子どもの育ちを重視した保育の再検討のきっかけとなったこと（加藤他，2021；芦澤他，2021；横井・鈴木，2021）や、保育者にとっても、「感染防止対応が大変だが、行事等が縮小したことにより余裕がもてた」（岡田，2022）、若手、中堅保育者は行事の中止によるゆとりができたことで先輩保育者からの丁寧な指導を受けられたことを喜ぶ姿が報告（及川他，2022）されている。加えて、インクルーシブ保育に関連する実践研究もあり、感染症対策による変更を通して、配慮が必要な子どもの違う姿が見え、それまでの保育を問い直す肯定的な知見が得られた（五十嵐，2022）。少人数保育や丁寧な保育者の関わり、環境調整が配慮が必要な子どもに良い方向に働く事例は、従来の保育の見直しを求め、インクルーシブ保育を進める契機になることが考えられる。

しかし、保育者の肯定的な意見は、COVID-19感染拡大下の制限が緩和されたときには、以前の状況に強く戻される可能性が縦断研究の中で明らかになった。すなわち、緊急事態宣言下において登園自粛期間では、少人数保育への肯定的な語りが頻出されたが、自粛が解除された後は、少人数保育に対する肯定的な見方を翻し、危機感を持って「年長児らしさ」を求める保育へ移行したことが示された（境・栗原，2021）。このように、通常保育に近い状況に戻ったときには強い揺り戻しが生じることが示唆された。少人数保育や行事の中止等によって保育者が感じた肯定的な意見を蓄積し、具体的な知見として少人数保育や行事の中止等が及ぼす意義を整理することは重要である。

### （3）子どもの姿の変化や懸念

子どもの姿の変化のうち、特に、保育者のマスク着用については多くの対象論文において、子どもへの食育や聴覚の発達、表現力の遅れ等の懸念が報告された。保育者のマスク着用の実態を調査した七木田（2021）では、大半の保育者が「子どものマスク着用について保育で気になることがある」と回答し、保育者のマスク着用の影響として、「子どもの反応が乏しくなった」と過半数の保育者が回答した。しかし、自由記述では、ポジティブな反応が10名、ネガティブな反応が12名で見られ、マスク着用を否定的に捉えていない保育者がいることも明らかになった。子どものマスク着用に関するガイドラインは随時更新されている。例えば、公益社団法人日本小児科医会は2020年5月には、米国疾病予防管理センター（CDC）およびアメリカ小児科学会（AAP）の提言に基づき、2歳未満の子どものマスク使用をやめることを提言した（七木田，2021）が、2021年4月に公益社団法人日本小児科医会は、2歳未満の子どものマスク着用には、誤嚥や窒息などの危険性があるため注意が必要と提言内容を

を更新した。WHOは2020年8月に、「Advice on the use of masks for children in the community in the context of COVID-19 Annex to the Advice on the use of masks in the context of COVID-19」を示した。本文書の中には、子どものCOVID-19の感染については完全には解明されていないが、子どもの最善の利益、健康、福祉を優先すべきであること、発達と学習の成果に悪影響を与えてはならないこと等を原則にするよう求め、5歳以下の幼児には通常、マスクを着用させるべきではないと記されている。厚生労働省は2022年5月に、2歳未満の乳幼児は、マスク着用は奨めず、2歳以上は、マスク着用を一律には求めず、施設内に感染者が生じている場合などは、施設管理者等の判断により可能な範囲でマスクの着用を求めることは考えられると記している（厚生労働省，2022b）。

明和（2022）は、COVID-19感染拡大下における「マスクの着用」や「身体的距離の確保」が乳幼児期の社会性の発達に影響を与える可能性が否定できないと述べる。実際に、他者のマスクの着用が感情推論に与える影響を調査した研究もある。Gori, Schiatti, & Amadeo（2021）は、31名の3~5歳、49名の6~8歳、39名の18~30歳を対象にマスク着用における感情推論の影響調査したところ、全ての年齢において影響がみられ、特に3~5歳の幼児において顕著であったと報告している。また、堀（2022）は、5歳4か月の幼児1名を対象に、表情刺激（口元をマスクで隠した絵と写真）に対する感情のラベリングをした結果、写真刺激の正答率が低く、マスクをした状態では「喜び」「驚き」「悲しみ」は評定しづらい可能性を示している。マスクの着用における感情推論の難しさが子どもの社会性の発達に影響を及ぼすかどうか、さらなる検討が必要である。なお、レビュー対象論文の溝田・佐藤（2021）の調査では、「社会性の遅れ」「言葉の発達」への影響を感じていない保育者がいたことも報告されており、保育者によってマスク着用の影響の認識は様々であるといえる。マスク着用による子どもへの影響があるならば、早急に保育現場へ知見を提示する必要があるだろう。子どもの安全を守るためには感染予防策は必須であるが、子どもの成長・発達を促す保育へのネガティブな影響を最小限にする工夫が必要である（本田・涌水・小林・平田・後藤・望月，2022）。なお、COVID-19が世界的に流行する前に、マスク着用の保育に及ぼす影響についての保育者の認識を調査した西館（2016）では、6割を超える保育者がマスク着用により困った経験があると回答している。その理由としては、マスク着用により、保育者の声が子どもに届きにくいことや、保育者の表情が子どもに伝わりにくいことが多く挙げられたことが報告されている。いずれの研究においても、保育者のマスク着用による保育・子どもの影響や、保育者視点による子どものマスク着用に関する言及が多く、子どもの発達への影響や、子ども自身がマスク着用をどのように感じているかについての実証研究はみられない。子どもの視点に立った研究の必要性があると考えられる。

### （4）連携

園内連携に関する調査（遠藤・小野，2022）では、コロナ感染症により園内連携が難しくなったという意見と、困難な状況だからこそ連携の大切さを感じ、職員全体が意識を高めることで連携に大きな変化はないという意見が得られた。このようなCOVID-19感染拡大下での連携が困難に感じた保育者と変化を感じなかった保育者がいたことは興味深い点である。連携の困難さはCOVID-19感染拡大

がきっかけとなり表面化したと考えられ、根本には他の背景要因が考えられる。また、保育者同士だけではなく、多職種（調理従事者）や外部機関との連携（吉川・那須，2022）の実施困難な実態が報告された。さらに、保護者との連携に難しさを指摘する調査もある。溝田・佐藤（2021）は「感染症を心配してある程度の制限を望む保護者と、保育の機会の充実を望む保護者とがおり、対応の難しさを感じている」等の実態を報告した。連携に関しては、実態調査に留まっているため、円滑な連携を促進する要因の検討や実践の蓄積が必要である。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、COVID-19 感染拡大下における保育・幼児教育に関する実態調査や実証研究の動向を報告した。以下、COVID-19 感染拡大下における保育・幼児教育に関する研究のまとめ、今後の課題、本稿の限界を述べる。

レビューをした結果、次の5点が明らかになった。1点目は、感染症対策および保育活動の変更の実態が多く調査や研究において報告された。それらは保育者の業務負担や心理的負担につながっていることを示す知見が多いが、感染症対策に関連する業務負担は致し方ないと捉え、それよりも以前からの「職場の人間関係」にストレスを感じる保育者の語りも報告された。2点目は、少人数保育や行事の中止等による保育活動の変更を、肯定的に捉える保育者がいたことが報告された。しかし、COVID-19 以前の状況に戻ったときに、強い揺り戻しが生じる場合がありうるため、肯定的な捉え方の背景要因や生起要因を整理する必要があることを指摘した。3点目は、感染症対策の視点から新たな保育活動の展開が見られているが、オンラインを活用する利点と課題を指摘した。4点目は、多くの保育者から、マスク着用による影響が報告されている。実際にマスク着用した他者に対する子どもの感情推論の困難さを示す調査もあり、感情推論の困難が子どもの社会性の発達との関連を検討する研究が必要である。しかし、マスクに関連する研究では、保育者の語りを中心に、子ども自身が感じるマスクの着用の影響や、子どもの発達への影響を実証的に検討した調査は少ない。そのため、今後、実証研究を蓄積する必要があることを指摘した。5点目は、保育者や保護者、他機関との連携の困難さが示されているが、その背景要因や連携を促進する要因の実証研究が求められることである。

なお、本稿では、保育者を対象とした研究を扱ったが、保護者の視点からみた保育・幼児教育の研究や、子どもの家庭での生活に関わる研究などを含めた検討をすることで、COVID-19 の子どもへの影響をより深く検討できると考える。

## 引用文献

- 阿部 真子 (2022) コロナ禍でのアウトリーチ活動の実践 ～「大学とこども園（保育園）をつなぐ双方向型でのオペレッタ公演」の試み～ 関西福祉大学研究紀要, 25, 13-21.
- 赤木 和重・古村 真帆・瀬川 千裕・川地 亜弥子・木下 孝司 (2022) コロナ感染拡大下における放課後等デイサービス職員のストレス状況 研究助成論文集（公益財団法人 明治安田こころの健康財団）, 56, 28-37.
- 芦澤 清音・山本 理恵・浜谷 直人・三山 岳・五十嵐 元子・林 恵・飯野 雄大 (2021) コロナ禍で保育者はどのように保育をしているのか—障がい児および外国人幼児を含む保育の実態調査（速報） 帝京大学教育学部紀要, 9, 115-123.
- 遠藤 純子・小野 友紀 (2022) COVID-19 (COVID-19) 流行下の保育現場における協働と人間関係の諸相—食と園内での学びを視点として 学苑昭和女子大学紀要, 970, 35-49.
- Gori, M., Schiatti, L., & Amadeo, M. B. (2021) Masking Emotions : Face Masks Impair How We Read Emotions. *Frontiers in Psychology*, 12, 1-9.
- 長谷 川美香 (2021) 新型コロナウイルス感染症が保育者に与える影響—領域「人間関係」の視点から 桜の聖母短期大学紀要, 45, 97-107.
- 堀 由里 (2022) 幼児の感情理解に及ぼすマスクと音声の影響—コロナ禍の表情認知に対する試行的検討 桜花学苑大学保育学部研究紀要, 25, 173-178.
- 五十嵐 元子 (2022) コロナ禍における保育の物語とインクルーシブ保育—保育者のインタビュー調査から 帝京短期大学紀要, 23, 183-196.
- 井内 聖・内田 雅志 (2021) 「コロナ禍」での幼児教育 はやきた子ども園 井内聖園長インタビュー 北海道臨床教育学会, 10, 4-11.
- 加藤 孝士・太田 光洋・渡邊 望・中山 智哉 (2021) コロナ禍が保育に与えた影響に関する予備的研究—保育者の意識の変化や保育の工夫に着目して 保育文化研究, 13, 103-115.
- 加藤 孝士・太田 光洋・原野 明子・姫田 知子・渡邊 望 (2022) コロナ禍における所長・園長の保育への取り組みと意識 こども学研究, 4, 25-44.
- 小林 真・上野 紗希 (2021) 幼児期の食育における保育者と栄養士・調理員との連携 富山大学人間発達科学部紀要, 16 (1), 103-109.
- 公益社団法人日本小児科医会 (2021) 乳幼児のマスク着用の考え方 厚生労働省 (2022a) 保育所等における新型コロナウイルスへの対応にかかわる Q&A (第十八報)
- 厚生労働省 (2022b) 学校生活における児童生徒等のマスクの着用について
- 溝田 浩二・佐藤 みちる (2021) 新型コロナウイルス感染症は保育現場にどのような影響を与えたのか—宮城教育大学附属幼稚園におけるアンケート調査から 宮城教育大学環境教育研究紀要, 23, 15-24.
- 明和 政子 (2022) マスク社会が危ない 子どもの発達に「毎日マスク」はどう影響するか? 宝島社
- 七木田 芳美 (2021) 保育者のマスク着用が保育や子どもに与える影響—COVID-19 禍による影響調査 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究, 7, 167-175.
- 西林 幸三郎・佐藤 利一・乾 恵子・藪 晶子 (2021) コロナ惨禍の中での幼稚園経営—附属幼稚園の「おはようコール」に取り組んで 大阪芸術大学短期大学部紀要, 45, 1-14.
- 西館 有沙 (2016) マスク着用が保育に及ぼす影響に関する保育者の認識 富山大学人間発達科学部紀要, 10 (2), 125-130.
- 野澤 祥子・淀川 裕美・菊岡 里美・浅井 幸子・遠藤 利彦・秋田 喜

- 代美 (2020) 保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討 東京大学大学院研究科紀要, 60, 545-568.
- 野澤 祥子・淀川 裕美・中田 麗子・菊岡 里美・遠藤 利彦・秋田 喜代美 (2021) 保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討 (2) 東京大学大学院研究科紀要, 61, 331-351.
- 小田 幹雄・橋浦 孝明 (2021) 宮城県仙台市における保育現場の新型コロナウイルス感染症対策の現状について (第1報) 羽陽学苑短期大学紀要, 11 (3), 33-50.
- 岡田 健一 (2021) 保育園等における COVID-19 への対応—保護者支援としてできること げ・ん・き, 184, 14-24.
- 岡田 恵 (2022) コロナウイルス感染症拡大における保育環境の変化と保育者のストレスについての研究 松山東雲短期大学研究論集, 53, 9-15.
- 及川 智博 (2021) COVID-19 感染拡大下の保育者に困難感を生じさせていた要因の検討—有事下の葛藤にみる保育の質の保障社会保育実践研究, 5, 27-37.
- 及川 智博・中嶋 寿宏・岩谷 樹・井内 聖・吉川 和幸・川田 学ぶ (2022) 保育者たちがふり返る“COVID-19 パンデミック”の1年目 北海道大学大学院教育学研究院, 140, 117-154.
- 小野 貴之・水内 幸恵・神永 直美 (2020) コロナ禍における動画配信の効果—附属幼稚園の事例から 茨城大学教育実践研究, 39, 347-356.
- 境 愛一郎・栗原 啓祥 (2021) コロナ禍による登園自粛を巡る保育者の経験と意識および価値観の変遷 国際幼児教育研究, 28, 19-34.
- 佐野 法子・糟谷知 香江 (2013) 被災した乳幼児の行動の変化—福島県いわき市における保育士・幼稚園教諭への調査から 応用障害心理学研究, 12, 27-41.
- 杉江 栄子・新美 洋裕・古橋 さつ子・新井 美保子 (2022) 幼稚園・保育所等における保護者への情報発信方法の検討 (2) —コロナ下における感染対策と家庭との連携 愛知教育大学幼児教育研究, 22, 45-54.
- 鈴木 秀子 (2016) 福島県における幼稚園・保育所の食育の現状と課題—栽培活動について 会津大学短期大学部研究紀要, 73, 2-36.
- 徳田 多佳子 (2022) コロナ禍における園内環境の変化—新入園児受け入れでの幼稚園年少組担任の取り組み 日本女子大学大学院紀要, 28, 179-188.
- 内田雄 (2022) 新型コロナウイルス感染症蔓延が保育施設における幼児の諸活動に及ぼした影響 仁愛女子短期大学研究紀要, 54, 29-34.
- 渡部 努 (2022) 愛知県三河地域の新型コロナウイルス感染症影響下における保育の実態 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要, 55, 111-118.
- World Health Organization (2022) Advice on the use of masks for children in the community in the context of COVID-19 Annex to the Advice on the use of masks in the context of COVID-19.
- 横井 良憲・鈴木 裕子 (2021) 新型コロナウイルス感染症 COVID-19 の中で保育施設の課題 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 6, 19-26.
- 吉川 寿美・那須 信樹 (2022) コロナ禍における特別な配慮を必要とする子どもへの支援—Web 会議システムを活用した保育者との協働による取組みの検討 中村学園大学発達支援センター研究紀要, 13, 72-76.
- 全国認定子ども園協会 (2020) 新型コロナウイルスに関わる就学前の子育て家庭への緊急アンケート
- 全国私立保育園連盟 (2020) 『新型コロナウイルス感染症に関する調査 2—第1波感染期間を振り返る—』報告書